

京都市京セラ美術館2022年度 展覧会情報

「^{きら}綺羅めく京の明治美術 — 世界が驚いた帝室技芸員の神業」

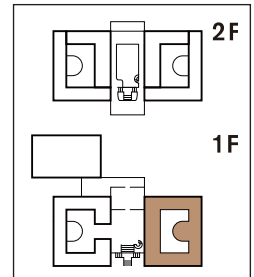
2022年7月23日(土)～9月19日(月・祝)

前期7月23日(土)～8月21日(日)

後期8月23日(火)～9月19日(月・祝)

本館 南回廊1F

主催：京都市ほか



帝室技芸員とは、1890(明治23)年に発足した制度で、皇室によって優れた美術工芸家を顕彰、保護するものです。美術界のトップランナーというべき、一握りの美術家が選ばれました。

制度発足の背景には、美術の奨励に加え、明治維新によって幕府や諸藩の庇護を失い、窮地に立たされた画家や工芸家を救い、優れた技術を保存する目的がありました。帝室技芸員は当代における美術の、最高の栄誉と権威を示す制度となり、1944(昭和19)年まで続くなかで、京都にゆかりのある美術家も多く選出されています。本展では、制度が発足した明治期を中心に、京都にゆかりのある19人の帝室技芸員を紹介します。最高峰とたたえられた名作を通して、明治期京都の技と美をご覧ください。

主な出品作：

望月玉泉《麟鳳之図》1907年 京都市美術館蔵

神坂雪佳図案・二代川島甚兵衛《紋織窓掛試織「百花」》1904年 川島織物文化館蔵

初代宮川香山《高浮彫牡丹二眠猫覚醒大香炉》明治時代前期 個人蔵

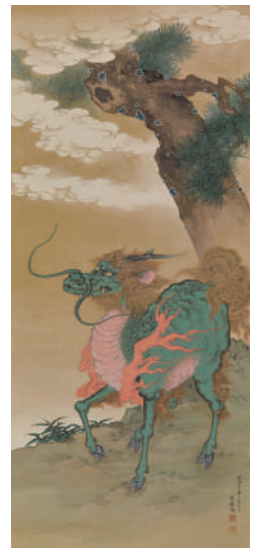
森寛斎《夏景山水図》1863年 滋賀県立美術館蔵

幸野樸嶺《秋日田家》1892-93年 東京国立博物館蔵

川端玉章《木下闇》1907年 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

岸竹堂《虎》1983年 東京国立博物館蔵

今尾景年《花鳥之図》1916年 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

望月玉泉《麟鳳之図》1907年
京都市美術館蔵左：初代宮川香山《高浮彫牡丹二眠猫覚醒大香炉》
明治時代前期 個人蔵
右：《紋織窓掛試織「百花」》(部分) 明治37(1904)年
神坂雪佳(図案)、二代川島甚兵衛
川島織物文化館蔵 画像提供：川島織物文化館

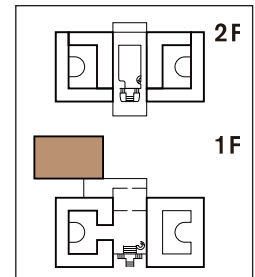
「跳躍するつくり手たち展：人と自然の未来を見つめるアート、デザイン、テクノロジー」

2023年3月9日(木)～6月4日(日)

新館 東山キューブ

主催：京都市ほか

監修：川上典李子



地球環境や社会のあり方が見直され、AIなどテクノロジーが進歩を続ける現代では、より広い視野での領域横断的思考が求められ、人間こそがなすことは何かが改めて問われています。

このような認識のもと、本展ではデザイン分野でリサーチと思索を重ねてきた川上典李子氏を監修に迎え、現在の立ち位置から果敢に跳躍(ジャンプ)し、新たな視点を示す気鋭のアーティストやデザイナーといった「つくり手たち」約20人(組)の提案や表現に目を向けます。京都をはじめとする日本の伝統や自然を意識した活動続ける「つくり手たち」は、過去と未来、自然と人工、情報環境とリアルな社会といった多様な関係性を繋ぎ、身体感覚を探究するなど独自の取り組みを実践しています。

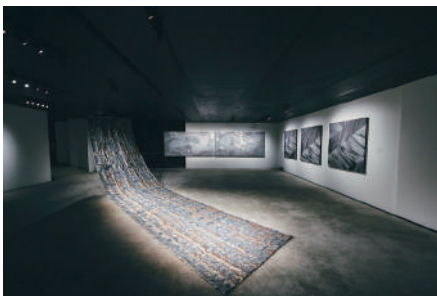
彼らの活動は、これからの世界や時代を見晴らす先見性にあふれた「問い」そのものであると言えるでしょう。それぞれの作品が放つ人間の創造のエネルギーから「つくり手たちの跳躍」を読み解くとともに、コロナ禍を超えいっそう大きな変革が予見される未来を生きるためのさまざまな「答え」を探る本展の試みにご期待ください。

参加作家(50音順)：

石塚源太 / 美術家(1982年生まれ)、岩崎貴宏 / 現代美術家(1975年生まれ)、A-POC ABLE ISSEY MIYAKE / 宮前義之(1976年生まれ)が率いるエンジニアリングチーム、佐野文彦 / 建築家・美術家(1981年生まれ)、TAKT PROJECT / 吉泉聡(1981年生まれ)を代表とするデザインスタジオ、細尾真孝 / クリエイティブ・ディレクター(1978年生まれ)、目[mé] / 荒神明香(1983年生まれ)、南川憲二(1979年生まれ)、増井宏文(1980年生まれ)を中心に構成される現代アートチーム ほか、計約20人(組)

監修：川上典李子(かわかみ・のりこ)

デザイン誌「AXIS」編集室を経て1994年に独立、ジャーナリストとして活動を続け、2007年から21_21 DESIGN SIGHTアソシエイトディレクターとして展覧会企画にも関わる。同館以外では「現代日本のデザイン100選」(国際交流基金主催)共同キュレーター、パリ装飾美術館「Japon-Japonismes, objets inspirés, 1867-2018」(2018年)共同キュレーター、「London Design Biennale 2016」日本公式展示キュレトリアル・アドバイザー等を務める。武蔵野美術大学非常勤講師。



左：細尾真孝(QUASICRYSTAL—コードによる織物の探求)2020-21年 Photo: KOTARO TANAKA © HOSOO

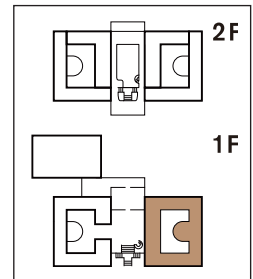
中：TAKT PROJECT (glow ⇔ grow: globe)2019年 Photo: Takumi Ota

右：岩崎貴宏(アウト・オブ・ディスオーダー(フレーム))2018年 ©Takahiro Iwasaki, Courtesy of ANOMALY

コレクションルーム

当館のコレクションは、近代以降の京都の美術（日本画、洋画、彫刻、版画、工芸、書）を中心に現在約3,800点を数えます。なかでも明治期から昭和期の京都画壇の作品には、近代日本画を代表する名品が揃い、全国有数のコレクションとなっています。

この類まれなコレクションの魅力を通年でいつでも堪能していただくため美術館リニューアル時に新設したコレクションルームでは、竹内栖鳳、上村松園など京都を代表する人気作家の名作紹介や、テーマをもうけた特集展示を通じて、京都美術の面白さをたっぷりと体感していただきます。



観覧料 一般^{*1} 京都市内在住の方：520円/京都市外在住の方：730円

小中高生等 京都市内在住の方：無料^{*2} / 京都市外在住の方：300円

小学生未満 無料

^{*1} 京都市在住の70歳以上の方（敬老乗車証等の提示で確認）、障害者手帳等を提示の方およびその介護者1名は無料です。

京都市キャンパス文化パートナーズ制度に登録している京都の大学に通学する学生の観覧料は100円です。

^{*2} 京都市在住または通学の小学生・中学生・高校生・高等専門学校生を含む

春期 2022年4月29日（金・祝）～7月10日（日）

特集「絵になる京都」

長く日本の文化の中心地である京都は、その景観や風土、風習など独自の個性を持ち、その個性は京都に暮らす人々によって守り育てられてきました。その文化は絵画にも見られ、古くは洛中洛外図をはじめ、近代、現代に至るまで多くの画家によって魅力あふれる京都の姿が伝えられてきました。寺社仏閣や自然、近代化する街並、現代に残る風情など、時代を超えて描かれた「絵になる京都」を当館のコレクションから紹介します。



左：池田達邨《南禅寺》1926年 京都市美術館蔵

右：伊藤快彦《鴨川真景図》1897年 京都市美術館蔵

夏期 2022年7月16日（土）～9月25日（日）

特集「幻想の系譜—西洋版画コレクションと近代京都の洋画」

昨年度、西洋美術の個人コレクションの一括寄贈を受けました。特に西洋版画についてはゴヤ、ホガースから始まり20世紀に至るまでを網羅しています。本特集では、なかでも充実した内容を誇る象徴主義を含む世紀末芸術、シュルレアリスム、ウィーン幻想派に属する作品群を紹介します。また、シュルレアリスムに傾倒した京都の洋画家・北脇昇や小牧源太郎の1930年代の作品もあわせて展示し、19世紀末から戦後に至る「幻想の系譜」を辿ります。

※夏期のみ会場が本館北回廊1階に変更となります。



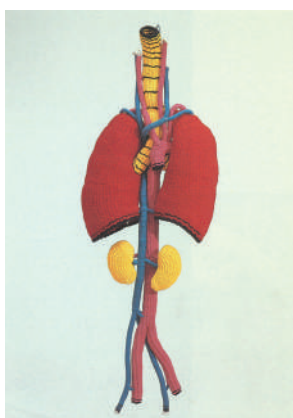
左：北鷗昇《眠られぬ夜のために》1937年
京都市美術館蔵

右：小牧源太郎《民族系譜学》1937年
京都市美術館蔵

秋期 2022年9月30日(金)～11月13日(日)

特集「^{からだ}身体、装飾、ユーモラス」

私たちは、自分の「^{からだ}身体」の全てを一度に見ることができるのでしょうか？ 体の内部など目に見えない部位を含めると難しいでしょう。人間は、断片的に認識している「^{からだ}からだ」を繋ぎ合わせて一つの身体のイメージを形成するという考えがあります。この展覧会では、「^{からだ}からだ」のパーツを鮮やかな色彩と大胆なスケールで制作した小名木陽一の新収蔵品を中心に、福田美蘭の《誰ヶ袖図》(2015年)などを紹介します。それらの作品を通して、日常生活において何気なく接している私たちの「^{からだ}からだ」について問い直します。



左：小名木陽一《肺と腎臓》1975年
京都市美術館蔵

右：福田美蘭《誰ヶ袖図》2015年
京都市美術館蔵

冬期 2022年12月4日(日)～2023年3月5日(日)

特集「東アジアと近代京都の美術」

明治後期以降、日本画や洋画の作品には、中国、朝鮮の風景や人物など東アジアに取材した画題が多く登場するようになります。それは、近代になり、多くの画家が中国に留学するようになったことをはじめ、日本のアジア進出が盛んになったことに起因するものです。東アジアの古美術についての情報もより流通するようになり、日本美術のルーツとしても注目されました。冬期展示では、東アジアをテーマにした、京都の日本画や洋画を特集し、近代の画家が東アジアに向けた視線について探ります。



土田麦徳《平床》1933年
京都市美術館蔵

ザ・トライアングル

京都市京セラ美術館のリニューアルオープンを機に、新進作家の育成・支援を目指して新設されたスペース「ザ・トライアングル」(北西エントランス地下1階)。リニューアルオープンの1年目より、京都ゆかりの新進作家を中心に新たな才能を紹介し、市民や観光客など来館者が気軽に現代美術に触れる機会を創出してきました。2022年度は下記の3人のアーティストを紹介します。

彦坂敏昭(ひこさか としあき) | 2022年5月31日(火)～9月25日(日)



左：〈ジャガイモ石(ペリオール・カレッジ、2020.3.4) 緑〉2020年
右：〈ジャガイモ石(ビムリコ、2020.2.27)〉2020年

彦坂敏昭は、人が他者や事物をわかる(わかり合う)状況に強い関心と疑問を持ち、「拾う」「描く」「歩く」などの異なるアプローチから、他者や事物との協働や対話に取り組んできました。近年は、ジャガイモに似た石を継続的に拾い集める行為が、他者との関わりから遊びへと広がっていくことに着目した「ジャガイモ石」プロジェクトや、過去のドローイング作品「波のスケッチの新聞」へ子どもが落書きをしたことをきっかけにはじまった、もとの作品コンセプトの上書きを他者にひらくプロジェクトなどを手がけています。本展では、すれ違いながらも重ねられた他者や事物との協働や対話を展示空間でひらくことで、鑑賞者との間に繋がり磁場を発生させることなのでしょう。

1983年愛知県生まれ。京都市在住。現在、京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程(彫刻領域)在籍中。2015年には、ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスとアイスランドに滞在。近年の主な展覧会に「MAIX (Malaysia Artist's Intension Experiment) 報告展 (TEMPAT BIBAH, クアラルンプール、2019年)」、「To Look at the Fire」(Daiwa Foundation、ロンドン、2017年)がある。また、アーティストコレクティブ〈木曾路〉を鬻恒太郎と前谷開と共に主宰。

藤田紗衣(ふじた さえ) | 2022年10月8日(土)～2023年1月29日(日)



〈DDD (warp)〉2021年

藤田紗衣は、シルクスクリーンやコンピューターの画像加工ソフトを用い、自ら設定したルールに基づくイメージへの多面的なアプローチ(スケール、素材、版数など)によって作品を制作しています。近年は、セラミックや書籍など、新たな素材や形式に版画技法を用いた作品も手掛け、複製技術としての版画技法と一点もののオリジナルのミックスを試みています。2021年に開催された展覧会「ハード／ソフト」では、「硬い／柔らかい」のキーワードに「ハードウェア／ソフトウェア」の意味が重ねられました。さまざまなメディアを自由に組み合わせることで、動かすものと動かされるものの2つの物事を行き来する、藤田のユニークな表現を紹介します。

1992年京都府生まれ。2015年にロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートに交換留学。2017年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻版画修了。現在、滋賀県在住。近年の主な個展に「ハード／ソフト」(I SEE All／準備中、2021年)など。2021年第54回造本装幀コンクール審査員奨励賞。

八幡亜樹(やはた あき) | 2023年2月14日(火)～5月28日(日)



《彼女が生きたかった、今日の日に。》
2021年

八幡亜樹は、独自の取材調査をもとにした映像、および映像インスタレーションを制作しています。近作の《彼女が生きたかった、今日の日に。》(2021年)は、犯罪の加害者家族であり被害者家族でもあるという複数の身体性を有する人物に焦点を当てた映像作品であり、その複雑な内奥に迫りながら、抑圧された現代社会の一面を浮かび上がらせました。

また、現在は「手食文化」や「味覚・嗅覚障害」に関心を寄せ、リサーチを通じた作品の制作に取り組んでいます。

八幡の作品は、インスタレーションという構造のなかに、現実世界では隣り合にくいものを接続することで、現代社会の目に見えない繋がりを可視化していきます。本展では、その繋がりを通して鑑賞者の心を深く、静かに揺さぶる作家の試みを紹介していきます。

1985年東京都生まれ、北海道育ち。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。2020年、京都市内にHENKYO.studioを設置し、以降同地を拠点に活動している。主な個展に「楽園創造 vol. 07 八幡亜樹」(gallery α M、2014年)、「彼女が生きたかった、今日の日に。」(HENKYO.studio、2021年)。主なグループ展に「六本木クロッシング」(森美術館、2010年)、「Journey to the West」(Lalit Kala Akademi、2012年)、「逡巡のための風景」(京都芸術センター、2019年)など。

「第9回日展京都展」

2022年12月24日(土)～2023年1月21日(土)

本館 北回廊1・2F、南回廊2F、光の広間

主催：第9回日展京都展実行委員会(京都市ほか)

日本最大規模の総合公募展「日展」の京都展を今年も開催します。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門にわたって、全国を巡回する基本作品と京都・滋賀の作家による地元関係作品の計約500点をご覧ください。

お断り：2022年度の展覧会は、京都市の予算が成立することを前提としているため、展覧会に係る予算が成立しない場合は、開催を見送ります。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況等の社会情勢によっては、会期等が変更になる場合がありますので、あらかじめご了承ください。

広報お問い合わせ 京都市京セラ美術館 広報 西谷・水野

リリースに掲載の広報画像をご希望の方は <https://forms.gle/gKGESR5Rn61ZE48p6> からお申し込みください。

TEL: 075-275-4271 E-mail: pr@kyoto-museum.jp

当館主催の展覧会以外の催し

問い合わせ先は各広報事務局となります。

「日中国交正常化50周年記念 兵馬俑と古代中国～秦漢文明の遺産～」

会期：2022年3月25日(金)～5月22日(日)

会場：本館 北回廊2階 <https://heibayou2022-23.jp/>

主催：京都市、産経新聞社、関西テレビ放送、京都新聞、陝西省文物局、陝西歴史博物館(陝西省文物交流中心)、秦始皇帝陵博物院

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭2022「アーヴィング・ペン」

会期：2022年4月9日(土)～5月8日(日)

会場：別館

主催：一般社団法人KYOTOGRAPHIE

共催：京都市

第3回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ2022

会期：2022年4月12日(火)～5月8日(日)

会場：本館 南回廊2階 <https://patinkyoto.info/>

主催：「第3回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ」推進委員会、一般財団法人ニッサ印刷文化振興財団、京都市

「ポンペイ展」

会期：2022年4月21日(木)～7月3日(日)

会場：本館 北回廊1階 <https://pompeii2022.jp/>

主催：ナポリ国立考古学博物館、朝日新聞社、NHK京都放送局、NHKエンタープライズ近畿、京都市

「アベンジャーズ展」

会期：2022年7月～8月

会場：新館 東山キューブ <https://avengersstation.jp/>

主催：読売新聞社、読売テレビ、キョードー関西、京都市

「アンディ・ウォーホル・キョウト/ANDY WARHOL KYOTO」

会期：2022年9月17日(土)～2023年2月12日(日)

会場：新館 東山キューブ <https://www.andywarholkyoto.jp/>

主催：アンディ・ウォーホル美術館、ソニー・ミュージックエンタテインメント、MBSテレビ、産経新聞社、京都新聞、WOWOW、FM802 / FM COCOLO、京都市

「サンリオ展 ニッポンのカワイイ文化60年史」

会期：2022年10月7日(金)～2022年12月11日(日)

会場：本館 北回廊2階 <https://sanriocharactermuseum.com/>

主催：関西テレビ、産経新聞社、京都新聞、京都市

「ボテロ展 ふくよかな魔法」

会期：2022年10月8日(土)～2022年12月11日(日)

会場：本館 北回廊1階

主催：未定